

## 談林俳諧小論：延宝期の西鶴の位置

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 本間 泉  |
| 雑誌名 | 日本文學誌要  |
| 巻   | 12  |
| ページ | 30-38   |
| 発行年 | 1965-06-30  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10114/00019120">http://hdl.handle.net/10114/00019120</a> |

# 談 林 俳 諧 小 論

— 延 宝 期 の 西 鶴 の 位 置 —

本 間 泉

魯迅は「阿Q正伝」を、その序で、「不朽ならぬ速朽の文章」、「文  
体が下卑ていて車ひきや行商人の文章だ」としている。町人、井原  
西鶴の文学を考える上で役に立つ文章の観点だ。芭蕉は「或は人情  
をいふとても今日のさかしきくま／＼迄探り求め、西鶴が浅ましく  
下れる姿あり」とした。正宗白鳥は、西鶴を「文学上の外道に立った  
魔才と評すべきものかも知れない」とされる。芭蕉と白鳥の西鶴評  
は鋭いが、魯迅の文章観に比較すると、西鶴の文学の命を掴むため  
に有用でないようだ。

西鶴に限らず、貞門、談林の俳諧も、まさに「不朽ならぬ速朽の文  
章」である。それらが現代でも古典であり得るためには、研究や批  
評の日常的な支えが必要で、これなくしてはたちまち紙屑同然とな  
りかねない。いま、研究史をおおまかにみると、談林俳諧を古典と  
して読まれた研究のうち、近藤忠義氏の業績を、その輝かしいひと  
つとみることに異論はなからう。その視座を端的に示せば、延宝年  
間の、坂田藤十郎の歌舞伎、宇治加賀掾の語り物、遊女評判記や役者  
評判記などと共に、談林俳諧、なканずく西鶴のそれを、元祿文学の

全円的には開花しなかった原型とされた点である。この小論では、西  
鶴の談林俳諧が表現している延宝年間（一六七三—八一）の問題を、  
あえて、歴史社会学派の方法で考えてみたい。

西鶴の俳諧の精髓は独吟俳諧にある。そうではなくても、ひとまず  
そう考えて欲しい。矢数俳諧は、そのひとつの現われであり、また、  
西鶴の行跡にそってみれば到達点でもある。ここから、独吟が西鶴の  
内部でもつ意味は後に検討することとして、独吟の性格を柱として  
矢数俳諧をみるなら、俳諧外の方式をほぼ暴力的にもちこんだそれ  
を、西鶴の命の俳諧とみてることも形式論理的には許されよう。

西鶴の意識では矢数俳諧こそ俳諧の中の俳諧であった。俳諧にお  
ける彼の行跡がなによりもそれを示し、あるいは、尾張の俳人、知  
足宛の彼の書状なども如実にそれを明かしている。矢数俳諧は西鶴  
にとって談林俳諧の本命であった。しかし、それは当代の典型的な  
俳諧であったのだろうか。

矢数俳諧は西鶴が発明した俳諧だ。発明しただけでなく、最初に  
興行して見事に成功した。そして、最後まで西鶴は矢数俳諧の第一

人者だった。

矢数俳諧はどう発明されたか。京都三十三間堂の通し矢から、西鶴は思いついた。そして、天下一の大矢数、尾州藩士、星野勘左衛門にならい、西鶴は、俳諧の句数で天下一になろうとした。彼の最初の矢数俳諧「大句数」の序は、そう読める。句数で天下一になる。

これはたしかに、俳諧上とんでもないことかも知れない。当時の貞門、談林の俳諧師にとっても現代の我われにとってもそうかも知れない。が、現代が評価するほど、貞門はともかく、談林の俳諧師たちが西鶴のこの暴挙を怪しんだか。「大矢数」興行の役人として談林の高門がきら星のごとく袖を連ねたところを見ると、そうは考えられない。むしろ、矢数俳諧は談林の俳諧師たちにとっても晴の俳諧興行と思える。役人の中には、西鶴のライバル、岡西惟中もみえる。すると、矢数俳諧興行は談林の俳諧師にとって、心中良しとしなくても、公の興行と認めざるを得ないものであった筈だ。そして、大坂の町人たちは、独吟一昼夜四千句の西鶴の壮挙をみようとして、三日も前から生玉社の場所をとって数千人も集った、と「大矢数」の跋はいう。たとえ俳諧上とんでもないものでも、社会的には盛大に迎えられる。なぜか。

では、矢数俳諧興行の社会的背景をさぐる。それも、西鶴に即してさぐる。

かねの鎖のなき君か代

臣は水日本一のあたけ丸（二葉集）

西鶴にこのような句がある。安宅丸は、名君（ともいわれる）家光の代に、日本一の軍用船として造られた。平和が続いたから、江戸は深川新大橋の北に、鉄の大鎖で長らく繋かれ、天和二年九月に解

体破却された。西鶴は町人にとって大事な平和を詠んだ、とも解される。平和の表徴としての安宅丸を讃美したもとれる。ところで、安宅丸を詠みこんだ句が他にもある。西鶴に矢数俳諧興行を成功させ得るとかねて自信をつけさせた、と思える「独吟一日千句」にみえる句だ。

浅草川の首たけの中

我思ひあたけ丸にも積れまひ

明てわかれのかねのくさりしや

恋の思いを安宅丸の大きさに量った。大きさに独特の感情をもたぬと、こう素直には詠めまい。安宅丸への無邪気な関心はその大きさにつきる。大きいから良いのだ。

むろん、尾張家には安宅丸はなかった。が、「天下の大矢数は星野勘左衛門其名万天にかくれなし」（「大句数」序）と西鶴も記した、將軍家の安宅丸に代る天下一はあった。大矢数は「初期に於ては主として加賀・紀伊・尾張の三家の、そして後期にあっては専ら尾張・紀伊の両家」の天下一争いの歴史をもつ（野間光辰「俳諧太平記」、国語と国文学第三百七号）。この、武道で一藩の面目を賭けた天下一の争いは、どうみても、通し矢の数を争う以外に天下一の覇権の仕様がなない。將軍家の安宅丸の天下一がその大きさであったように、通し矢の数の多さにつきる。

「大矢数」興行後間もなく尾張鳴海の知足に宛てた書状で、「俳諧世にはじまって是より大きな事あるまじき」と、西鶴は自ら誇っている。また、「今度西山宗因先師より日本第一前代之俳諧の性と世上申わたし候。さてくめいはく此度也。」とも伝えている。

「大矢数」興行の成功、その一昼夜独吟四千句の句数は、宗因をし

て、やや皮肉な意味もこめながら、日本第一前代未聞の俳諧の性と評さしめた。將軍家の安宅丸、尾張家の星野勘左衛門が、それぞれ武力の天下一の表徴であったごとく、矢数俳諧は談林が貞門とは違ひ天下一の俳諧である表徴として社会的に機能した。

では、量に価値をみる、將軍家↓尾張家↓談林のこれらの現象、つまり、矢数俳諧興行の社会的背景をどう解くべきか。丸山真男氏は「身分社会における社会関係は最上層におけるそれを典型として、それに倣って下層身分の社会関係が形成されるのを常とし、従って意識形態もそれに応じて上より下への浸潤が行われる」とされた（『日本政治思想史研究』）。矢数俳諧が時代の枠に規定され、そうされることによって、当代の典型的な俳諧興行の方式となり得た由縁が知れる。おおざっぱにいつて、西鶴が歴史に規定されながら、やや歴史を超えた作品は「置土産」の一作ではなからうか。特に、談林俳諧の支持層は、江戸、京、大坂、堺などの、天下（幕領）の町人であったから、先に示した、身分社会における意識形態の上より下への浸潤が一層機能したかも知れない。

かねの鎖のなかき君か代

臣は水日本一のあたけ丸

この句をつくった西鶴の意識にもその間の事情はうかがえよう。ではこの時代はなぜ、天下一を大きさや数に簡明に見出せたのか。この質から量への価値転換ともいえる現象はなぜ生じたのか。つぎにこれを、西鶴の俳諧に即して、彼の思想とも呼べそうなものにみてみたい。

算用や世界のこらず砂の数

土圭仕懸でめぐる月影（大矢数）

この地球は算用してみればその全体が砂の数でわかる、と一応解釈できると思う。そして、砂時計で連想し次句が付けられている。土圭仕懸とはゼンマイ仕掛の意味だろう。すると付句は、自転しながら地球をめぐる約一カ月で変化する月の光、という意味に近いだろう。町人にとって必修の算用も、このような連句の世界にまで拡大されると、俗ではあるが、まんざら馬鹿にもできない。阿蘭陀流を自らも標榜した西鶴の面目躍如たる句だ。俗ではあるが、その俗な限界も含め、かえって、この時代を典型的に生きた俳諧師の、認識の仕方の特徴を示してはいまいか。そこには、部分の数量を極めつくせば全体を解けるという、新時代の認識の独得な方法がうかがえるようだ。西鶴の矢数俳諧も、詩の方法が通常一作品に宇宙の姿をみようとするのと逆に、数を詠みつけければ何時かこの世界の全体像を表現できるという方法、つまり思想を意味しないだろうか。

算用や世界のこらず砂の数

この句によりとれるのはそのようなものだ。ちなみに、沢口一之の「古今算法記」（一六七〇）は、代数における未知数に相当する「天元之一」をたてて初めて問題を解いたものであり、そこには、負数に関する法則や、方程式に二根のある場合なども提示されてあるという（前田一良「経験科学の誕生」岩波講座日本歴史近世3）。西鶴の世界観も、俗ではあるが時代の波に足下を洗われているものだ。また、「独吟一日千句」にはつぎのような句がみえる。

日蝕はめくる暦の証拠にて

当時用いられていた暦は貞観年中に採用された宣明暦であった。そして、天文学者渋川春海が改暦の第一回の上表をしたのは一六七三年であったが、二年後の日蝕では宣明暦の方がまだ正しかった。

「独吟一日千句」は一六七五年の作であるから、ちょうどその時の日蝕を詠んだ句とわかる。その後春海は実測をつづけ、自分の観測の結果で「宣明曆後三於天二日」を検証して第二回の上表をし、さらに第三回の上表により、ついに宣明曆は一六八四年に授時曆に改められた。西鶴が、浄瑠璃「曆」を新作上梓したのは、この改曆の翌年であった（春海についての記述は、前田一良氏の前掲書に拠る）。西鶴の宇宙観とも呼べそうなものは、俗ではあるが、実証科学、あるいは前田一良氏が前掲書に定義して「実証科学」の名称に代えて用いられた経験科学が、本草学をはじめ様々成立した新時代の波に足下をひたひたと洗われていたものだ。そのような西鶴には、もはや、連歌師とおなじに、あるいは、和歌の規範のうちに「心」を持した貞門の俳諧師とおなじに、「月」や「花」をみることは不可能だろう。むしろ、ここにいう「月」や「花」は、写生主義——自然主義の肉眼に映じたままの月や花でなく、花鳥風月に自然の摂理、つまり芭蕉の用いたことば、造化、その働らきを凝視して得た自然観あるいは宇宙観の象徴である「月」や「花」の意である。とりあえず図式化して示すなら、日本の詩歌の系譜で貞門俳諧に下るまでの伝統的な自然観に対し、西鶴は合理的に、芭蕉は超合理的に對している構図が、伝統を没収して創造する姿勢である。

#### 土圭仕懸でめぐる月影

この句などもそのような事情を示している。そして西鶴は算用が好きだった。好きだからよく出来たのだろう。彼の浮世草子の中にみられる計算はほとんど正確になされている。俳諧でもよく数を詠みこんだ。それが実によく成功している。

よい手懸かゝりはないか卅日

浮世小路を唯はとをさぬ

二十年憂秋ながら後家で住

利発があまつて庭の白露

此頃は寝ても覚ても空をみる

出雲千俵売てのけうか

これらの句はいずれも「大矢数」からあげた。感性が数に通う句は珍らしい。さすがに算用好きの西鶴だ。そのほか直接に数字で表現されなくても、町人社会の算用にもとづく生活の断面が彼の句で実に良く活きている。それは、貨幣経済がまだ青春期にあった特徴でもあるが、貨幣経済が日本近世で運用された時、和算の発達とその普及が相互補強の關係にあったことはいうに及ぶまい。それが時代の特質でもあったから、当然ほかの俳諧師の句作にもおなじ傾向はみられるが、とりわけ西鶴が秀れている。後世、矢数俳諧が強く否認されるその理由は、逆にそれがこの時代における典型的な俳諧であったからではないか。その傍証のひとつに、芭蕉は「予が風雅は夏炉冬扇の如し、衆に逆ひて用ふる所なし」といっている（柴門辞）。そして、矢数俳諧を否定する考えに必ずといっていいほど示唆を与えているのは、蕉風の価値観なのだ。西鶴と芭蕉は分けて考えないと、ついに区別できなくなるだろう。

では西鶴の場合、芭蕉とちがって、大坂の町人たちに盛大に迎えられる俳諧をなぜ易易としてつくれたのか。最初に問題となるのは、やはり、西鶴の出自の問題であろう。固定しはじめた身分社会の枠は、現代の我われの予想を遙か上回るほど、出自の差を決定的

な要因としたらしい。芭蕉は、武士階層から遊離して風騷の人となつた自己の境涯を、苦い思いもこめて述懐している。

情年月の移こし拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは仏籬祖室の扉に入らむとせしも、たどりなき風雲に身を責め、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかり事さへなれば、終に無能無才にして此の一筋につながる。(幻住庵記)

三十代の後半に浪々の身となつた宗因が、俳諧の価値観を全否定して「いづれを是と辨ずすいた事してあそぶにはしかじ」(阿蘭丸陀二番船)とした裏に、必死になつて忘れたい現世への執着がちらついている。西鶴と宗因との句作における質的な差も、出自の差に深く由来しているらしい。幸運な西鶴は、大坂根生の町人であり(「団袋」序)、それも裕福な商家であつた(見聞談叢)。が、問題は一筋縄で縛れる体のものではないらしい。西鶴もまるっきりの町人として終始したわけではなかった。「名跡ヲ手代ニユヅリテ、僧ニモナラズ世間ヲ自由ニクラシ」と、乏しい伝記資料のなかの白眉ともいうべき「見聞談叢」は伝える。この、西鶴が家業を手代に譲つて自由の身となつた時期は、彼が薙髪して法体となつた時期と想定される延宝五年(一六七七)前後と一応おさえられよう(延宝五年西鶴薙髪説は、野間光辰氏の「西鶴年譜考証」に拠る)。家業を手代に譲る際、あるいは活計に絡むなんらかのやりとりはあつたかも知れぬ、が、それはおこらう。矢数俳諧初興行の成功(延宝五年)を機に、俳諧師としての生活が成り立ちはじめたのであろう。これは単に錢儲や暇の問題でなく、と考えるより、錢儲と暇を土台に、西鶴の視座が町人より自由なそれに転換した問題である。文学の営みが現実を表現することにあるなら、表現する行為は現実のうちのひとつを選

びとる自由を実現する。今や西鶴は自由な視座を自発的に得た。しかし問題は更に先にあるらしい。自由な身となつた西鶴を待ちうけていた状況についてである。

それは、つぎのような彼の句をどう解釈するかの問題ともなる。

(一) 詠やる医者智者福者今日の月

千軒あれば友すぎの秋

(二) 買懸すます事なく横雲の

されども世間はたつて行山

(三) 乾坤の箱を明ては何もなし

馬鹿つくされし親の跡取

(四) 綿売や関東までも隠れなし

利根な顔つき平野目がきく

いずれも「大矢数」から引いた句である。解釈するにあたつて、近世史の、全国的な商品流通の成立時点に関連する諸問題、これに絡まざるを得ないが、いわゆる歴史社会学派の呼称にもうかがえる、歴史と文学の学問の方法のちがいを、あたかも無視したかのごとく誤解されてきた由来に、すこし触れねばなるまい。近藤忠義氏にはじまるこの学派の方法が、もっとも有効であるのは、ほぼつぎの二点においてであろう。ひとつは、科学としての文学研究を志向する点、もうひとつは、文学の時代に規定される側面を解く場合である。とりわけ、氏の業績が、研究史において一時代を画しておられるのは、日本文学の古典で、もっとも時代に規定されることの大きかつた近世前期の文学のうち、社会のいちばん近くに虚構をかまえた西鶴、その研究と、西鶴を中心に捉えた、文学史の近世文学の成立の研究に、歴史社会学派の方法が駆使されているからである。と

もかく、近藤忠義氏をはじめとして、歴史社会学派の文学研究が、他の学問の方法を流用してきたわけではないのであって、極論すれば、西鶴なら西鶴に対する自己の好みを発展させる上で、歴史学などを学ぶ態度を保持すればよからう。私の場合、西鶴がその中で生きた歴史について、社会体制史でなく、日常生活に近い木目こまかな側面で、「岩波講座日本歴史近世3」執筆の諸氏の研究、などから多く教えられたことを記し、いそぎ本題にもどらう。

さて、引用したうちの(一)の句は、医者、智者が福者と共に並んだ意味を、医者、あるいは智者も入れて、長袖者流の町人化した現象とみたい。そして、おそらく所は大坂であろう。その大坂は、ここに住むあらゆる階層の人びとが、近世都市大坂の自己展開する時点で、その組織にあみこまれ、あぶれ者の出ない共過ともすぎの社会となっている(「友すき」の語に問題があるが、「千軒共過」の諺を踏まえた修辭とみる)。句にも、そのような余裕をのびのびと楽しんでいる味がある。長袖者流が町人化されたこと、ここに、西鶴が家業を手代に譲り世間を自由に暮らす身となれた、そもそもの社会的根拠もあると考えられる。ともかく、彼が俳諧師一本になっても、社会は彼を余計者にはせず、大坂という近世都市の文化的な一機能として、自由な身であると同時に共同体の一員でもある、作家にとって稀有な幸運ともいふべき、特殊な状況が彼を待っていた、と考えられる。俳諧師として、また浮世草子作者としての彼が、作家としての眼と、町人としての眼と、いわば複眼を持ち得て、自在に浮世の種々相を描きえたのも、この辺に由来している、と考えられる。延宝元年(一六七三)の、大坂における談林俳諧の始発、西鶴の主宰した仮題「生玉万句」の興行も、近世都市大坂が自分で歩き出した

時点、その表徴とも考えられよう。ところで、(二)以下の句は(一)の句の傍証としてあげたものである。(二)の句は千軒共過の状況を、経済面で証すものである。大坂なる近世都市が自己展開していることは、商業で買手の側が定まってきたことでもあり、売手は買手を倒産させるのが不利益となるので、買掛を清算しないで延ばせる状況が出たと思われる。(三)の句も、そのような状況において、固定した得意先をもつ店の出現と期を同じくする、町人の世襲財産、つまり家督の問題を詠んでいる。(四)の句は、大坂の近郊小都市である平野郷の完全な自立を示している。それは、全国的な商品流通の機構において、大坂から自立した姿である。大坂町人、西鶴からみても、平野郷の商人は利根で目がきく商人であったわけだ。

ところで、「大矢数」は延宝八年(一六八〇)に興行されたから、先にあげた句は、その年までに、西鶴が経験した内容である。下限はそれできるが、上限はどの程度にしなければよからうか。無理のないところ、彼が俳諧に志したという(「大矢数」自跋)明暦二年(一六五六)、西鶴十五才の頃から、とおさえてよからう。つぎのような点で、それを寛文、延宝期と、おおまかにおさえるのも面白い。西鶴の、いわゆる良き美しき時代を設定できるからである。若くして彼が俳諧点者となった、と伝える「俳諧石車」によれば、それは、寛文二年(一六六二)、西鶴二十一才の時である。彼の人生の良き美しき時代の初めとみなせよう。あるいは、「好色一代男」、「好色二代男」に登場する遊女のうち、西鶴が讚美するのは、意外なほど、この寛文、延宝期に名を馳せている。また「日本永代蔵」に登場する分限者たちも、巻一の四「昔は掛算今は当座銀」にみえる、

三井九郎右衛門、実は三井家の祖とされる三井八郎右衛門が、現金売買掛値なしの新商法を初めたのは、天和三年（一六八三）であり、ほぼこの年あたりを分水嶺として、新旧の分限者にふりわけられるので、童話的な、といってよいほどの金儲のできた、町人にとっての良き美しき時代を、寛文・延宝期（一六六一—一八一）までとみてよからう。俳諧師としての西鶴が得意の時代であったのは、矢数俳諧興行を創始した「西鶴俳諧大句数」のそれが延宝五年（一六七七）、一日一夜二万三千五百句独吟を興行したと伝えられるのが貞享元年（一六八四）で、江戸は駿河町の越後屋呉服店が新商法を始めた翌年にあたる、この期間である。西鶴は、放恣なといえるほど大胆に、新時代の種々相を俳諧にとりこみ、抱え切れないほどの現実の諸問題に、後、浮世草子で責任をとらされている。彼が生涯の問題を抱えこんでしまったのも、この俳諧師としての得意な時期においてであった、と考えられる。西鶴の俳諧がいちじるしく浮世草子的な内容をもつことは、近藤忠義氏の「日本文学原論」、暉峻康隆氏の「西鶴 評論と研究 上」、などに収められた研究に詳述されているから、いまは一例だけあげよう。

#### 淋しさも薄鍋一つたのしみて

むかし遣ひし銭ようてゐる（大矢数）

この句の世界は、すでに、西鶴晩年の浮世草子、「置土産」のそれに近い。単純ではあるけれども新鮮なのは、浮世草子より、経験が新しいからだ。それでは、家業を手代に譲り自由な身となった西鶴のおかれた状況については、この辺でうち切りたいが、これでは、やや塩のきかない西鶴像となりかねないので、そのような状況と、裏合わせになっている、俳諧師としての職業の問題に、簡単にふれ

ておこう。

#### 俳諧師ひとり淋しき戻りあし

「両吟一日千句」にみえる句である。長袖者流が町人化されるのは、それが職業として成り立つからであるし、都市の生活は、ありとあらゆる職業を生み出すものらしい。猫の蚤を三文で取歩く職業が、「西鶴織留」巻三の四「何にても知恵の振売」に現われて、驚嘆させられる。都市の生活は職業を介在しないでは、人と人を結びつけないらしい。仕事が終わって一人で帰る時は、仕事の辛さと、それから解かれた孤独がしのび寄るだろう。「好色二代男」巻一の四「心を入れて釘付の枕」に、つぎのような文章がある。

嶋原の別も。吉原のおさらばといふ声も。同じ物うき朝。霄の気色もかはって。清十郎が軒につもれば。まだふれ小雪と。禿が妻に請て。独寝て居る沢都に。あたまからかけて。こりや何じやと。おもやるといへば。ぬからぬ只して。吉野の山を雪かと思れ。ばと。證ながら起て。腹をも立す。太鞍持の役とて。夕アは無理酒のあいをさせられ。埒もあかぬ端哥をほめ。女房どものかくす事まで。人中でかたらせ。世に身過程悲しき物はなし。

市井の艶隠者でもあった西鶴が、職業の系譜で血縁のある幫間に対し、しみじみと共感を寄せつつ、ものにした名文である。考えてみれば、その果ては、一日一夜二万三千五百句独吟に至った、彼の得意な矢数俳諧も、俳諧点者としての巨大な広告塔でもあったわけだ。貞門と争い、同門の高弟と宗因門下の覇権を賭けた、かなりせつない所業でもあったわけだ。その動かぬ証拠に、「惣て此道さかんになり、東西南北に弘る事、自由にもとづく俳諧の姿を我仕はじめし已来也。」などと、やや誇大広告なみの言辞を、「大矢数」の自



跋で弄している。ほかに、西鶴が点者としての署名に、「俳大矢数四千翁」とか、「難波俳林二万翁」と号していることなど、見逃せぬ事実である。芭蕉が「夏炉冬扇」のごとき風雅を志向し、江戸は深川に草庵を結び、それさへ暫く居ては打ち破って旅に出たのも、俳諧師が町人化され、異様なまでに職業化される状況に処した、捨て身の構えと考えねばなるまい。が、それは、当時の人びとに乗り超えることの不可能な時代の粹であった。行きつくところ芭蕉にしても、「終に無能無才にして此の一筋につながる」ための条件は、「暫く生涯のはかり事とさへなれば」であり、つまり、風雅の道でまあどうやら生活して行けることになったので、という条件がついて廻っていたわけだ。

そのような時代の粹を逆手にとって、西鶴は駆け続けた。果てまで走り、遂に俳諧の外へ躍り出た。西鶴にとって、工夫をこらす必要のあったのは、俳諧の興行であって、俳諧そのものではなかった。彼が俳諧そのものについて考えたのは、結句、彼の俳諧を宣揚するためにであった。つまるところ俳諧は、西鶴にとって恰好の表現の手段であったのだ。彼が俳諧の作法を守り、あるいは俳諧の価値観を中庸に持ったのも、表現の手段を失いたくなかったからだ。しかし、俳諧の興行にかけて、西鶴ほど熱心であった俳諧師は珍らしい。彼は、俳諧本来の方法に思考をめぐらす暇もないほど、表現したい新しい現実の姿を見ていた。当時考えられるどんな俳諧の方法、あるいは価値観よりも、現実の姿の方が生きていたからだ。

ほぼ全国的な規模で都市が成立してくる歴史の段階で、大坂は天下の台所という言葉が示すごとく、新興政治都市江戸の経済を支えるべく人工的に形成された新興商業都市であった。そこで、先にも

述べたごとき、ありとあらゆるものの職業化がおこり、西鶴はその先端を走り続けた。人間関係が職業を介在しないと成立しない人間の孤独化。その果てまで生きた西鶴。独吟俳諧興行で功成り遂げた、その「大矢数」の跋で、「惣て此道さかになり、東西南北に弘る事、自由にもとづく俳諧の姿を我仕はじめし已来也」、といった西鶴の意識は、個人のそれであった。本来、俳諧の連句の方法は、「我」と「我ら」が未分である、共同体の精神構造、それを前提としてのみ成立している。連吟する連衆は制作者であり享受者である。この関係を、独吟俳諧興行は、一人の制作者と他の聴衆の関係に一举に換える。矢数俳諧興行は、一昼夜に詠める句数を競争し、見世物ともなつて、聴衆を慰めたわけだ。加藤鬼翁が「大矢数」に寄せた序で、「此時諸芸盛にして遊興巷に溢る。俳諧猶其一也。」といったのも、その序を「誤序」と記したごとき、おどけだけとは読めない。仕事熱心な西鶴が辿った跡を、独吟を中心に簡単な表にしてみよう。

- (1) 一六七三年、一夜に百韻——「鶴永独吟」
- (2) 一六七五年、一日に千句——「独吟一日千句」
- (3) 一六七七年、一昼夜に千六百句——「大句数」
- (4) 一六八〇年、一昼夜に四千句——「大矢数」
- (5) 一六八四年、一昼夜に二万三千五百句

西鶴のたゆまぬ努力がしのばれる。「大句数」の序で、「我つねくね片吟し詠草書にして三千六百句迄する事あり」、「殊に諸人の中に独吟に句の取まはし五百句なるへき人はやうく式百と心得給ふへし」という。「片吟」とは、執筆役なしに自ら吟じ自ら書記すること、西鶴が一昼夜に千六百句独吟の興行をする前に、すでに三千六百句も詠む修行を積んでいたことが知れる。そして信じられな

いくらいの、一日一夜二万三千五百句独吟の離れ技に到ったのだ。特殊な訓練次第で、人間がどのような妙技にも到達する例を、「西鶴諸国はなし」巻四の五「力なしの大仏」に、西鶴はつぎの順序で書いている。大男なのに腕に力がなく世間の笑ひ者であった男が、一子を訓練して、十五才で洛中洛外に有名な力持に育てる咄である。

(1) 物につかまって立ち上る幼少の頃から、六尺三寸の棒を持ち習う。

(2) 三才の時、一斗の米を持ち上げる。力芸を習い続け、

(3) 八才の時、体のかたまった牛の子を持ち上げる。毎日三度ずつ持ち上げ続け、

(4) 九才の時、車を引くほど大きくなったその牛を、宙にさしあげる。

西鶴は「諸国はなし」の序で、「人はばけもの」と認識しているが、先に表で示した彼の独吟の足跡を想うと、何よりも西鶴の方が化け者じみている。ちなみに、「西鶴諸国はなし」の上梓されたのは、一日一夜二万三千五百句独吟の翌年である。ともかく数においては、俳諧史上、個人の制作能力が連衆のそれを超越した、記念碑的な時点である。記録不能であったのか、後世はその内容を知る由もないが、宗因も驚いた、四千句独吟の「大矢数」は、やはり、西鶴の句作の代表的なものを、いちばん多く収めている。西鶴の俳諧の精髓は独吟にある。共同体の精神の特徴を示す、「我」と「我ら」の未分の中から、化け物じみた巨人<sup>タイタン</sup>、西鶴が出現した。俳諧の職業化の時代の波に乗って。そのような精神史の局面で、芭蕉は意識的に連衆をつくらざるを得なかった。俳諧の連句の方法が危機的な状

況下にあった時、芭蕉の弟下に対する実作上の指導は、鋭い批評となり、蕉風の俳論に結晶した。「三冊子」に、「師のいはく 脇、亭主の句を云る所、則挨拶也。雪月花の事のみ云たる句にても、あいさつの心也との教也。」とあるが、連句の発端で結ばれ直す、連衆の微妙な人間関係の有様を示している。

連句本来の方法を超え、俳諧の外へ駆けぬけた西鶴は、独吟の制作者と、その享受者である聴衆との関係を、浮世草子の作者と読者との関係へ大きく転換して行く。浮世草子の第一作「好色一代男」を書いた西鶴の精神の姿勢を、弟子西吟はその跋文で「穠の夜の楽寝月にはきかしても余所には漏ぬむかしの文枕とかいやり捨られし」と、なんとも日本的ではあるが、密室の発想に連なるものとしてとらえている。おそらく、独吟俳諧に西鶴がひたすら走らなかつたら、近世文学の草子の歴史は、今みるそれとはかなり異なる相貌となっていたろう。が、あの、廷宝の末から天和にかけて、鋭く大きく文学史の転換する領域に、問題はすでに入っており、それを解くには、俳諧師でなく、浮世草子作者である西鶴に正面から視点を据え、稿を改めねばなるまい。

——三二年三月卒業・博士課程在学——

\*

\*

\*